



IFS導入事例

日本工作油株式会社様

基幹システムを IFS Applicationsに刷新 データを活用した 業務改善が加速



充実した標準機能で プロセス製造業の業務をカバー

多様な金属加工油を提供し、製造業を中心とするお客様の事業に貢献している日本工作油。同社は、長年、改修しながら運用を続けてきた基幹システムを「IFS Applications™ 10」にリプレースして、全面リニューアルを図りました。より厳密な原価計算が可能になったり、紙の業務プロセスを電子化したりするなど、データを軸にした業務改善を加速させ、競争力の強化につなげています。

複雑化や人材不足に直面する基幹システムを全面リニューアル

金属を加工するには様々な油を uses。プレス加工において金型と材料の間の摩擦を制御するために用いる金属塑性加工油、マシニングセンターなどの工作機械で潤滑の役割を果たす切削・研削油、金属の錆を防ぐ防錆油、機械などの油汚れを落とすための洗浄油、金属を熱処理する際に使う焼入油などです。日本工作油は、1927年の創業以来、これらの金属加工油の生産と供給を通じて、自動車や電子部品、建設など、多様な業界の企業を支えてきました。国内だけでなく海外にも現地法人や製造拠点を構え、グローバル展開する企業のニーズにも対応しています。

現在、多くの企業がDXを掲げ、様々なデジタル施策に取り組んでいます。「2025年の産」とも表現されるレガシーシステムの刷新に取り組む企業も少なくありません。同社も、その1社です。

同社の基幹システムはIBMのAS/400をベースに自社開発してきたもので、営業、購買、製造、品質保証、経理、人事などの業務をカバーしています。しかし、機能追加や連携開発を段階的に繰り返してきた結果、システムが複雑化。「さらに開発を担ってきた担当者も定年を迎え、システムの全体像を把握している者、レガシー技術での開発経験を持つ者も、ほとんどいなくなっています。近々、メンテナンスもままな

日本工作油株式会社について

1927年創業の金属加工油メーカーの老舗。金属塑性加工油を主力に、切削・研削油、防錆油や洗浄油、焼入油など幅広い製品を提供。自動車や自動車部品、鉄鋼、非鉄金属、機械、電機、精密機械など、広範な顧客の事業を支えている。

www.nihon-kohsakyu.co.jp

日本工作油株式会社



らなくなるのは明らか。利用を継続すること事態が経営リスクに直結するような状況でした」と日本工作油の小堀 渉氏は語ります。

そこで同社は基幹システムの刷新を決断。ERP パッケージを採用し、システムを全面リニューアルすることを決めました。

「リライトやリホストにより、システムをオープン系にマイグレーションする方法も考えられますが、既存システムが RPG などの古いプログラミング言語で構築されていること、長年の改修による『ツギハギ』がひどく、設計書や仕様書なども十分には整っていないことなどを考えると、プログラミング資産を再利用するのは現実的ではないと判断。パッケージを活用することを決めました」と日本工作油の福田 雅之氏は説明します。

プロセス製造業の業務を標準機能でサポート

新基幹システムを担う ERP パッケージを選定すべく、同社は複数の製品を比較。最終的にチェンシー日本の提案する「IFS Applications 10」の採用を決めました。

「まず評価したいのが当社のようなプロセス製造業との親和性です。候補になった EPR パッケージの一部には、組立製造業にはスムーズに適用できるものの、プロセス製造業に適用するにはカスタマイズが必要なものもありました。一方、IFS Applications 10 は、ほぼ標準機能でプロセス製造業に適用が可能でした」と小堀氏は言います。

ロビーの積極活用にあられるデータ活用文化の浸透

約1年の導入プロジェクトを経て、日本工作油は IFS Applications 10 を導入。完成した新基幹システムは、原料・レシピ・品種検査項目など製造技術の管理から、受注業務を含む営業、購買、出荷・発注・棚卸しなどの工場業務、工場の製造プロセス、品質保証、さらに経理まで、同社の基幹業務をほぼトータルにカバーしています。システム基盤には「Microsoft® Azure™」を採用し、クラウド化も行いました。

「この期間で導入できたのはパッケージならでは。これにより限界まで来ていたシステムの複雑化などの問題から解放されました。また、パッケージの標準機能をそのまま使うということは、世の中の多くの企業が採用しているベストプラクティスに沿って業務を行うということ。システムの課題解決だけでなく、業務改善にもつながっています」と福田氏は強調します。

例えば、原価管理は、より正確に行うことができるようになりました。

以前のシステムは、自分たちだけで開発し続けてきたこともあり、実績データの管理が中心。データを活用するための機能は、それほど充実していませんでした。そのため原価は「原材料費+工場の機械費+人件費÷総生産量（リットル）」というシンプルな計算で割り出し、細かな製品種別や注文量に関係なく、一律に用いていました。

しかし、バッチの製造量が10リットルの時と100リットルの時では、実際の原価は異なります。10リットルも100リットルも生産にかかる時間はそれほど変わらないため、100リットルの方が人件費や機械費が割安となるためです。

「現在は IFS Applications 10 の標準機能で、製造量、利用する釜、工程ごとの機械費や労務費を細かく設定した上で原価計算を行うことが可能。厳密な原価管理が行なえるようになりました。これにより、同じ特性を持つ製品同士であれば、私たちから見て利益率の高い方を提案した

取材にご協力いただいた方



日本工作油株式会社

代表取締役社長 小堀 渉 様



日本工作油株式会社

電算室

課長 福田 雅之 様

り、不採算となっている品番を把握して、場合によっては他製品と統合したり、様々な意思決定を行っていただけます」と小堀氏は言います。

このようにデータによってビジネスを可視化し、意思決定や日々の業務に役立てる。データ活用文化の浸透は、IFS Applications 10 が提供するダッシュボード「IFS ロビー」の積極的な活用からも見て取れます。

「何らかの数値を業務の参考にしたい場合、ほとんどの数値はシステムからデータを抽出して、それを手作業で加工・集計しなければなりませんでしたが、それが現在は、IFS ロビーを通して多くのデータを、いつでも瞬時に参照できるようになっています。営業部門、生産部門など、部門によって参照する数値の種類が変わりますが、IFS Applications 10 は、比較的簡単に IFS ロビー画面をカスタマイズすることが可能。私たち IT 部門がフォローせずとも、現場のメンバーが中心となって、それぞれの部門に最適な IFS ロビーの画面を構築しています」と福田氏は語ります。

このように連携や可視化など、データ環境が整理されたことは、月次決算の早期化、クラウドサービスとも連携させた請求書業務の電子化といった成果にもつながっています。

蓄積されるデータを活用して業務改善をさらに加速

今後も日本工作油は、IFS Applications 10 を活用して、業務改善を進めていく考えです。

「IFS Applications 10 の導入後は、お客様とやり取りする帳票類の電子化も着実に進んでいます。ただ受注処理の一部には、メールで送付されてきた注文を手動で IFS Applications 10 に投入するといった作業もまだ残っています。注文サイトを立ち上げたりして、このような業務も段階的に効率化していきたいと考えています」と小堀氏は言います。

このように同社は、レガシーシステムを IFS Applications 10 にリニューアルし、メンテナンスの難しさといったシステム面の課題を解消しただけでなく、データを軸に据えた業務改善を加速しています。さらにデータが蓄積されれば、改善の範囲も拡大し、営業活動の可視化による案件獲得率の向上など、より幅広い成果、ひいては競争力の底上げが期待できます。業務の複雑性から基幹システムの刷新や業務改善に慎重になっている他のプロセス製造業にとって、同社のチャレンジは、大きな勇気を与えてくれるはずです。

IFS Applications 10 により、各部門の業務改善が確実に進んでいます。取り組みを発展させ、さらにビジネス競争力の強化に資する施策を進めていきたいと考えています

日本工作油株式会社
小堀 渉 様

導入の効果

- 標準機能の網羅性の高さでカスタマイズを最小化
- パッケージの導入でスピーディにシステムを構築
- より正確な製造原価の把握が可能に
- 各部署のニーズに応じたダッシュボードを実現
- ビジネス競争力強化に資するシステム基盤を整備



お問い合わせ

詳細は、IFS の Web サイト ifs.com/ja をご覧ください。お問い合わせは、info.jp@ifs.com までメールでお寄せください。

